

会話における「なんか」の働き

—大学生による自由会話データを中心に—

宮永愛子・大浜るい子

1. はじめに

「あの」や「まあ」などと並んで会話において頻出する「なんか」は、従来、場つなぎ語や言い淀み、フィラーなどと呼ばれ、意味のあるものとは考えられてこなかったが、近年次第に注目され、会話中様々な働きをしていることが指摘されている(田窪・金水(1997)、Philips(1998)、鈴木(2000)など)。しかし、未だ解明されていないことも多く、実際の会話内に出現する多様な使用例を十分な根拠をもって説明できるものにはなり得ていないのが現状である。

そこで本稿は、実際の会話で使用されたできるだけ多くの「なんか」を対象とし、先行研究で挙げられた機能を手がかりに、その使用環境を観察・分類することによって、「なんか」の会話中の働きを実証的に解明しようとするものである。

2. 「なんか」に関する先行研究

「なんか」に関する先行研究を見ると、その多くに共通しているのは、「なんか」は、「なにか」の音便化形式で、実際の様々な使用例は、辞書に記載された「なんか」の代名詞的用法、副詞的用法から派生したものであろうということである。『大辞林』(第三版:2006)には、代名詞的用法:内容が不定、あるいは未知であるこ

とやものを示す(例:「**なんか**欲しいものを言っ
てごらん。」)、副詞的用法:形容詞や動詞を修飾し、どことなく、なぜだか分からないが等の意(例:「**なんか**寂しい。」)とある。

ただ、これらの基本的意味の場合、「なんか」とそれを受ける語は隣接あるいは近接しているが、会話中に見られるものの多くは、そのようにはなっていない。それ故に、実際の例では基本的意味を認めることが困難であったり、また代名詞的用法か副詞的用法かが区別しにくかったりすることが多い。

このような「なんか」に関しては、これまで様々な機能が指摘されているが、その中には、「話題転換の前置き」、「発話のメインポイントの前置き」など話題展開との関わりを指摘したもの(Philips(1998)、内田(2001)、林(2006))や「ターン取得の前置き」、「フロア維持」のように発話権との関わり(Philips(1998)、鈴木(2000)、林(2006))を指摘したものがある。

中でも、多くの研究に共通して言われているのが、「なんか」は、婉曲表現や伝聞表現と共起し、後続する発話内容の不確かさを表示するという機能である。Philips(1998)は、「知識や記憶の欠如を示し、明言や断定を避けることができる」とし、エメット(2001)は、「後続の

言葉が正確な描写ではないということを含意する」という。また、内田(2001)は、「不明確な内容を後に従える」とし、鈴木(2000)も、「不確実性の標識」が「なんか」の本質的機能であると結論づけている。これらの「不確かさの表示」機能は、辞書の基本的意味との関わりも想起させ、注目できる機能である。

しかし、鈴木(2000)が考えているように、不確実性自体は婉曲表現や伝聞表現によって明示的に表示されるものであるが、これらの表現が文末に現れるため、より早い段階で「なんか」によってそれらの出現を予告・強調するというのは正しいだろうか。このような考え方は、明示こそされていないが多くの研究者に共通しており、婉曲表現や伝聞表現によって表示される機能が「なんか」の機能であると考えられているように見受けられる。しかし、果たしてそうであろうか。

一方、認知的視点を取り入れた大工原(2009)では、「なんか」は「今語られる命題情報が、(考察ではなく)探索によって得られたものである」(傍点筆者)ことを表すとし、生起環境が類似している「どうも」と比較しながら、話し手の高度な考察や判断を必要としない視覚や聴覚によって得られた情報や、瞬間的、直感的に得られる情報などと共起しやすいと説明している。大工原(2009)は文レベルでの分析であるため、そこで指摘されることが実際の会話における「なんか」の使用をすべて説明できるかどうか明らかではないが、「なんか」を付加することによって、提示される命題が十分な考察や熟慮、高度の判断を経たものではないことを示すという考え方は示唆的である。

そこで、本稿では、まず、先行研究で指摘されている婉曲や伝聞表現との共起関係を今一度見直した上で、大工原(2009)の指摘を手がかりに、実際の会話データに用いられた「なんか」の使用環境を分類し、その機能を解明する。

3. 分析データの概要

本稿で使用した会話データは、東京外国語大学で作成された『BTS による多言語話し言葉コーパス』(宇佐美まゆみ監修：2005)に収録されている初対面同士の雑談 11 会話(録音時間 262 分)と友人同士の雑談 22 会話(録音時間 496 分)である。会話参加者は 18 歳～26 歳の学生(男性 20 人、女性 46 人)で、同性ペアで行われた自然会話である。このデータを選んだのは、「なんか」が若い世代の会話で多用されることが報告されており(Philips (1998)、山根 (2002))、多くの事例が収集できるであろうと考えたためである。なお、データの表記方法に関しては、「基本的な文字化の原則(BTS)」に従ったが、紙幅の関係上一部改変している¹⁾。

4. 「なんか」と婉曲・伝聞表現との共起関係

まず、「なんか」と婉曲表現や伝聞表現が共起しやすいという鈴木(2000)の記述が、どの程度該当しているか調査を行った。調査はデータ中に現れた全ての「なんか」を対象とし²⁾、それに婉曲・伝聞表現が後続しているかどうか、そして逆に、婉曲・伝聞表現に「なんか」が先行しているかどうかを調べた。その際、婉曲表現には、断定を避けるために用いら

れたと思われる表現として、「みたい」「感じ」「かな」「ていうか」「なあと思って」「気がする」「ような」を、伝聞表現には、第三者の発言の引用であることを示す表現として、「とか言って（とかって）」「（だ）って」「らしい」「言われる（た）」「聞いた」を採用した。「なんか」と婉曲・伝聞表現の間には一語のみが挿入されたものから複数の語・句が挿入されたものまであったが、共起関係の有無については基本的には1ターン内での共起であることを基準とした。途中で聞き手の短いコメントやあいづちが挿入された場合も1ターン内とした。

また「なんか」が何度も繰り返された後に一つの婉曲・伝聞表現が出現したり、一つの「なんか」に対して、複数個の婉曲・伝聞表現が出現して、「なんか」と婉曲・伝聞表現が一对一の共起関係になっていない場合は、「なんか」に対する婉曲・伝聞表現の後続関係を見るときは「なんか」を、婉曲・伝聞表現に対する「なんか」の先行関係を見るときは婉曲・伝聞表現を複数個として数え、それぞれを「共起関係あり」とした。結果は表1、2に示す通りであった。

まず「なんか」については、総数2132の使用例が収集された。その内、婉曲・伝聞表現が後続したものはそれぞれ568(26.6%)、438(20.5%)で、後続せずに「なんか」のみで使用されたものは、1126(52.8%)であった。他方、婉曲・伝聞表現から見ると、使用総数はそれぞれ1434、595で、その内「なんか」が先行していたものは、それぞれ684(47.7%)、346(58.2%)であった。まとめると、「なんか」のほぼ半数に婉曲・伝聞表現が後

続し、また婉曲・伝聞表現の約半数にも「なんか」が先行するということになる。

ここから「なんか」は、一方で曖昧かつ非断定的な表現が選ばれる場面や、第三者から聞いたことを報告する場面で使用されやすいと言えよう。しかし、また他方で約半数の「なんか」には婉曲・伝聞表現が後続しておらず、また婉曲・伝聞表現の半数近くにも「なんか」が先行していない。このことから、「なんか」と婉曲・

表1 「なんか」から見た婉曲・伝聞表現との共起関係

「なんか」に後続した表現		出現数	小計(%)	合計(%)
婉曲表現	みたい	238	568 (26.6)	1006 (47.2)
	感じ	116		
	かな	98		
	ていうか	38		
	なあと思って	30		
	気がする	23		
	ような	25		
伝聞表現	とかって	135	438 (20.5)	
	(だ)って	127		
	らしい	123		
	言われた	32		
	聞いた	21		
婉曲・伝聞表現が後続しない			1126 (52.8)	
「なんか」の総出現数			2132 (100)	

表2 婉曲・伝聞表現から見た「なんか」との共起関係

婉曲・伝聞表現の総出現数			「なんか」の先行数(%)	
婉曲表現	みたい	460	256 (55.7)	684 (47.7)
	感じ	254	133 (52.4)	
	かな	386	150 (38.9)	
	ていうか	104	47 (45.2)	
	なあと思って	130	46 (35.4)	
	気がする	45	18 (40.0)	
	ような	55	34 (61.8)	
伝聞表現	とかって	249	147 (59.0)	346 (58.2)
	(だ)って	139	72 (51.8)	
	らしい	131	88 (67.2)	
	言われた	56	24 (42.9)	
	聞いた	20	15 (75.0)	
合計		2029	1030 (50.8)	

伝聞表現は必ずしも常に共起するわけではないと言うことができる。

先行研究が「なんか」について指摘しているような「情報の不明確さ」や「発話内容に対する話し手の自信のなさ」、「責任転嫁を示す」、「言質を避ける」、「判断の不確実さ」(Philips (1998)、鈴木 (2000)、エメット (2001))等の機能は、むしろ婉曲・伝聞表現が持つ機能であると言える。婉曲・伝聞表現が用いられても「なんか」が先行しない場合もあるということを考えれば、「なんか」は、婉曲・伝聞表現が持つ機能にさらに何か他の意味合いを加えるために使用されるのではないだろうか。

以下では、「なんか」は「提示された発話内容が十分な熟慮や判断を経たものではないということを示す」という大工原 (2009)を手がかりに、本データで見られた「なんか」をその使用環境から8タイプに分類し、その機能を考える。

5.「なんか」の使用環境

大工原(2009)によれば、「なんか」は情報が話し手の心内にどのように得られたかということに関して、高度な考察や判断を経ず、直感的な探索によって得られたことを示す認知レベルの標識であるとされている。しかし実際の会話データを見ると、情報の認知に関わるもののみならず、情報の伝達に関わっていると思われるものが観察された。即ち、情報の認知はきちんとできているが、得られた情報を聞き手にどのように伝えればよいかというレベルで「なんか」が使用されていると思われるものである。また、認知レベルでも、ある情報そのものの感知・認

識が探索的であるというものと、情報の感知・認識はできているが、事柄自体が成立する背景や事情が未だ理解あるいは納得できていないというものが区別できることが分かった。

以下では、「なんか」の使用を「情報の感知段階」「情報の納得段階」「情報の伝達段階」の3段階に大別し、それぞれの使用例を下位タイプ別に整理する。そして、「なんか」は我々が情報を感知し、それを納得し、その上で他者に伝達するという一連のコミュニケーション過程の各段階で、それらの活動が熟慮や判断を伴ったものではなく、直感的・瞬間的探索であることを示すものであることを明らかにする。

5.1 情報の感知段階の「なんか」

情報の感知段階の「なんか」は、ある事柄自体が本当に起こっているのかどうかについての判断が十分になされていないことを示すものである。本データでは以下の3つの下位タイプが見られた。

5.1.1 事象・出来事の感知に関するもの

これは、大工原(2009)が挙げている「視聴覚命題」や「体感命題」に相当するもので、「明確なことは言えないが、見たり聞いたり触れたりした瞬間そのように感じた」と言い換えられるものである。

例1[初対面⑤/83-86]³⁾

UF10 そういえば、昨日 SMAP のコンサートやりましたね。

UF11 ほんとですかー？

UF10 うん。なんか、昨日、のんびりしてたら、聞こえましたよ。

例2[初対面⑩/50-54](自己紹介時に)

UF19 **なんか**、若いですよ、**なんか**。

UF20 いやー、若くないです。幼いだけです。

5.1.2 評価や判断の感知に関するもの

このタイプは、話し手が行っている評価や判断が十分な熟慮を経たものではないことを示すもので、辞書に記載された副詞的用法「はっきりした理由を挙げることはできないが、なんとなくそのように思う」に近い。

例3、4では九州人の気質や日本の医療についての自己の判断に確かな根拠があるわけではないという気持ちが表されている。同様の気持ちが例5では「何とも言えないんですけど」で明示されている。

例3[友人①/279]

IF21 **なんか**、ま、九州の人って気が強い感じがするじゃん。

例4[初対面⑥/448]

UF11 やっぱり病院だけは、**なんか**、日本の方がいいなみたいなふうに。

例5[初対面⑧/72~74]

UF16 **なんか**、他の大学と比べて、時間の流れがちょっと、ゆったりしてるような気がしたんですけども(そうなの?)。他の大学、知らないから何とも言えないんですけど。

このタイプは、「感じ」「みたい」「かな」「ような」「気がする」などの婉曲表現と共に用いられることが多かった(破線部参照)。このような蓋然性を弱める表現は、自分の判断が確実なものではないことを示すことができるが、直感的で熟慮を伴わない探索的な感知では、実際それらが確実でなかったり、またそのよう

に装った方が好都合であったりするからであろう。しかしここで強調したいことは、不確実性を表しているのは、これらの婉曲表現であり、「なんか」が付加されることで示されるのは、それらの感知が直感的・探索的であるということであろうと思われる。

5.1.3 他者の発言・行動の感知に関するもの

これは、過去に第三者から得た情報などを紹介する際に使われるもので、「確かそのようなことを聞いた気がする」というものである。その内容が正確なものかどうか十分に熟慮していないということを示すことができる。

例6[初対面①/609]

UF02 (大学に在籍できるのが) **なんか**、最高8年とか聞いたけど。

このタイプは、例7のように、聞き手の領域に属することを述べる際に、相手に確認しながら、自信がないようにふるまう場合にも使われていた。

例7[初対面⑧/123~125]

UF15 (中国語専攻の聞き手に) **なんか**聞いたんですけど、中国語では母方と父方では、何だっけ?おばさんとおじさんの呼び方?が違う??とか聞いて。

5.2 情報の納得段階の「なんか」

次に見るのは、情報自体は感知できているが、なぜそのような事柄が成り立つのか、その背景や事情が納得できていない段階での使用と考えられるものである。事柄の背景や事情が納得できなければ、その事柄自体を十分に理解したこと

にはならない。このグループは、理解が十分でない状態のまま聞き手に伝達する際に「なんか」が使われていたものである。このグループにも3つの下位タイプが認められたが、これらは5.1で挙げた感知段階の3タイプにそれぞれ対応する納得段階のものと言える。

5.2.1 事象・出来事の納得に関するもの

このタイプは事象や出来事について述べるという点では、5.1.1のタイプと同様であるが、事象や出来事の感知自体はできているのだが、「なぜそういうことになるのか分からない」という事柄の背景が理解できていないというものである。本データでは、第三者から不利益を被った、自分の知らないところで決められた、あるいは気がつけばそのようになっていたなど、自身が関与できないところで起こった事柄について語られる際に使用されていた。

例8は珍しい名前でも人に理解されず困る話、例9は就職希望の会社が求める無理な条件、例10は交通の便が悪い自宅の立地条件について話したものであるが、これらの不利益や不満は直感的なものとして提示され、熟慮の末の深刻なものとはなっていない。

例8[友人⑥/517~521]

IF11 え、なんか、あの自己紹介すると、ほんと嫌だしー。(なんで?)絶対1回で聞き取ってもらえないし。(あーそう?)なんか美容院予約しよう、電話とかしても、絶対、違うふうに確認されるから。

例9[友人①/305]

UF02 なんか、準1、準1級以上の

レベルが(うん)、求められてて、(えーそうなんだー)笑っちゃって

例10[初対面⑦/354]

UF13 なんかこう、私のうちって、ここからちょうど北に行ったところなんですけど(うん)、あの、電車がまっすぐないんですよ。

5.2.2 過去の自身の判断や行動の納得に関するもの

一般に自分が下した評価や判断に納得がいけないということは起こりにくいからか、本データではこのタイプは全て、過去の自分の考えや行動を振り返って、「今思えばなぜそんなことを考えていたのか分からない」というニュアンスで述べるものであった。

例11では、無駄な就職活動が続けていた自分を自嘲的に語り(破線部参照)、例12では、親のことや世間体から大学院進学を考えていた自分を、現在の自分の考えとは異なるものとして語っている。

例11[初対面①/249~253]

UF04 なんか、すごいバカで、4月の終わりに内定もらってて、それでも、あんまり、ちょっとこの会社いまいち、行ってもいいけど、ちょっといまいちかなーと思って、結構最近まで就職活動続けてたんですよ。(そうなんですか)でも結局、4月に一番始めに内定もらった会社に行くことにしたっていう。もうあたしバカだなーって。

例12[友人⑫/37-59]

IF24 なんか、親のこととか世間体を考えて(うんうん)、大学院に行こう

(うん) って思ったんだけど(うん)、それでも結局時間がもったいなかったり(あー)、行ってからやっぱね、迷うことになるかなと思って。(中略)とりあえずは、学生を卒業して(うん)、働くことが自分にとって一番重要だと、最近思うようになったのね。

5.2.3 他者の発言・行動の納得に関するもの

このタイプは、第三者の発言や行動を紹介する点で 5.1.3 のタイプと同様であるが、5.1.3 のタイプが発言内容の不確かさに関わるものであったのに対し、こちらは、なぜそのようなことを言う(する)のかという理由や背景が十分に納得できていないまま、聞いたことや見たことを報告する際に「なんか」が使用されていたものである。その際の発言内容に注目すると、発話者はその内容を「疑わしい」「思いがけない」「納得がいかない」「不可解である」「戸惑う」ものとしてとらえていることが多かった。

例 13 は勤務先の校長の発言を引用したもの、例 14 は福島と山口の出身者の間に特別な感情があると言われたことを話しているものである。例 13 の「すごいひどくて」、例 14 の「全然感じないけど」という言葉が示すように、発話者自身その引用内容に「戸惑い」や「納得のいかなさ」を感じていることが分かる(破線部参照)。

例 13[初対面⑤/648~656]

UF10 **なんか** (うん)、そういえば、うちの学校の校長とか(うん)、すごいひどくて高校の(うんうん)。**なん**

か、(何で?) **なんか**ね、あの、"あんまり、有名じゃない大学の先生には、あんまり来てほしくない"みたいなことを(おー)、けっこうおおっぱらに言ってる(うん)、もめてましたよ。

例 14[初対面③/137~157]

UF06 **なんか**あたし福島なんですけど、(あ、そうなんですか) **なんか**、入学した時に、"福島出身です"って言ったら、"福島って、山口県の人と、仲悪いよね"とか言われて。

⇒UF05 え、全然そんなことない。

UF06 (中略)で、たまたま、横に、山口出身の男の子がいて、"そんなことある?"って言ったら、"知らない"、とか言われて。(あー)あー(うん、ない) 全然感じないけど。(ねー)

また第三者の発言を直接引用することは、元の発話場面を再現して見せ、聞き手をその現場にいるような気持ちにさせることができる。このタイプには例 14 や例 15 のように、話し手が戸惑いや呆れを表明する前に、聞き手の方から引用内容に対する気持ちを表しているものがあつた(⇒部分参照)。「なんか」によって「熟慮したものではない」という形で提示したものが、相手から同意を示すコメントを受けることになり、口に出すことがためられるような場合には特に効果的な提示の仕方とも言えるだろう。

例 15[友人①/465~472]

IF02 **なんか**ね、あたしの友達ね、**なんか**飲食 1 個受けたら、**なんか**最終面接それも 2 回しか面接なかったらしいんだけど(うん)、確か。(うん)

2回、1回、確か2回だったと思うんだけど(うん)、その最終面接も1対1で、なぜか、(うん)しかもその、面接官が、1時間面接あって(うん)、面接官が50分ぐらいしゃべって<笑いながら>、(<笑い>)その子は、**なんか**うなずいてただけで、内定が出たとかいって<笑い>。

⇒IF01 話をよく聞いてくれるから、女はそれでいいのかな、みたいな。

5.3 情報の伝達段階の「なんか」

これは、出来事の感知はできており、またその成立を納得もしているが、それをどのように言語化して伝達するかという段階で、まだ十分な熟慮がなされていないところで用いられる「なんか」である。このグループには、なんとかして適切な語彙・表現を探そうとしているものと、詳細な説明を放棄し相手の感情や感覚に訴えるものが認められた。伝達段階のこれら2タイプは、感知・納得段階の各3タイプに直接対応するものではないが、事象・出来事や他者の言動等をできるだけ正確、詳細に描写しようとするものには前者が、具体的な説明よりも感情を見せることが効果的な評価や判断においては後者が使用されやすいように思われた。

5.3.1 伝達時の語彙・表現の検索に関するもの

このタイプは、ある事物や事象について話し手は明確なイメージをもっているが、それを説明するための適切な表現が見つからず、比喩や例示、特徴の列挙など様々な方法で相手に分かってもらおう

と説明に苦心している場合での使用である。「なんか～みたいなもの／ようなもの」という形式で使われることが多く、辞書に記載の代名詞的用法に似た働きをしている。

例16は目に銀色の斑点が出た話を、例17はインドネシアに滞在経験のある話者が、ジャカルタ出身の学生が地方出身の学生とは異なる話し方をするという話をしているものであるが、「こう」「なんだろ」「すごい」などの表現を多用し、説明に苦心している様子が見てとれる(破線部参照)。

例16[友人⑨/83~85]

IF17 疲れてたらしくて、(うん)テスト中に**なんか**、銀色の**なんか**さー(うん)、頭ぶつけた時に出てくるようなさ、やつがこう、こうやって回りだしてー。

例17[友人②/414~420]

IF03 **なんか**しゃべり方とか。(あー、違うよね) **なんか**、方言っていうか何だろすごい若者言葉みたいな。(あー) 何だろ。(差をつけたがのかな)そう、ちょっと**なんか**、テレビで、芸能人が使ってる、みたいな言葉(へー、そっか)。(中略)何だろうね、なん、ちょっと、うまく言えないんだけど。

5.3.2 伝達時の感覚的・感情的表現による代用に関するもの

5.3.1のタイプが語彙・表現を探そうとするものであったのとは対照的に、このタイプは詳細に説明することを放棄し、当該状況で発するであろう言葉を直接引用の形で提示したり(例18、19)、「す

ごい」のような一般的誇張表現で済ませたりして(例 20)、理解を相手の感情や感覚に任せてしまうものである(破線部参照)。

例 18[初対面④/56]

(留学生活の感想を聞かれて)

UF08 **なんか**何て言うかな、学生生活満喫みたいな(あー)。

例 19[初対面⑤/755]

(他の学生が皆英語ができるという話で)

UF09 こう何だろ、心理的にも**なんか**、"あー"って、なってきたそう。

例 20[初対面⑨/51]

(ダンス部の衣装が派手だという話で)

UF07 「サークル名」で、少しだけ踊ってる人いるの、知ってますか?**なんか**すごい、もっとすごいですよ。

6.「なんか」の機能

以上見てきたことをまとめると、「なんか」には、我々が情報を獲得する段階とそれを他者に伝達する段階において、「十分な考察や熟慮、高度の判断を経ず」(大工原 2009)、直感的・探索的にそれらを行っていることを示す働きがあると言することができる。

情報の獲得段階では、感知段階と納得段階が区別された。前者には事象や出来事、評価や判断、そして他者による発言や行動の感知に関するものがあり、また後者では上のそれぞれの場合に対応して、自身を取り巻く出来事、過去の自身の判断や行動、そして他者の発言や行動に対する不満・呆れ・困惑などが見られた。そして伝達段階では、適切な語彙や表現を見つけようとするものと、むしろ

感覚的・感情的に訴えようとするものが認められたが、いずれも十分適切な言語化ができないままの伝達である事を示していた。

「なんか」は、感知と納得、伝達という一連のプロセスの中で、「十分な形でなし得ていない」「十分な熟慮を経ていない」ことを示すものと考ええる。

本データの「なんか」に関しては、ほぼこれらの分類のうちいずれかで説明が可能であるが、例の中には、感知・納得段階のいずれに関わるものかを特定することが難しいものもいくつかあった。

例えば例 21 は「実際にどうかは分からないが自分には大変そうに見える」という感知段階の例としての解釈も可能であれば、「なぜ大学生が就職活動にそこまで懸命に励むのか理解できない」と納得段階の例として解釈することも可能である。

例 21[初対面①/242~248]

UF02 **なんか**すごいみんなの就活見ると、すごい大変そうだなーって(うんー)。あんなにかけずりまわって(うん)行きたいところにも行けなくて、で第三とか第四志望のところに入るんですよー(うーん)。あれでやっていけるんだろうかって思うんですよ。

「なんか」にはこのような曖昧さがあるのではないだろうか。感知段階と納得段階の活動を明示的に表現しようとするれば、例えば「私の印象だけですが」とか「なぜだか分かりませんが」などと表すこともできる。しかし、このような明示的かつ意識的な活動をする以前の瞬間的・直感的な探索を、一様に「なんか」で示して

いるとすれば、それを受け取る聞き手にとっても後から分析する者にとっても、それがどちらのレベルのものか判然としない場合もあり、どちらの解釈も可能であるように見えることがあるのではないと思われる。

ところで、情報の感知や納得、またその言語化の過程において、十分な考察や判断がなされていないということを敢えて示すことには、どのような効果があるのでしょうか。これには、次のようなことが考えられる。

(1) 直感的な感知や納得であるため、より本音に近い可能性がある。それらを会話相手に見せることで会話者間に親近感を作り出すことができる。

(2) 熟考や判断を経たものではないので、場合によっては撤回が可能である。そのため会話相手と意見が異なる場合、「よく考えればそうではない」という形で対立を回避することができる。

(3) 伝達段階については十分な言語化をしないまま提示するため、相手の同感覚、同様な体験等をあてにし、場合によっては相手からの助け舟を期待する等、会話者間に共感が作られやすい。

このように見てくると、「なんか」が、Philips (1998) や山根 (2002) の報告にもあるように、若い世代の会話に多く使用されるというのは納得のいくことである。

7. おわりに

本稿では、会話における「なんか」に関して、先行研究で指摘されている婉曲表現や伝聞表現との共起関係を今一度見直し、話し手の発話内容に対する「不確か

さ」だけでは説明できないことを示した。その上で情報の感知、納得、伝達という我々のコミュニケーション過程においていずれの段階にも見られる熟慮のない直感的・探索的活動であることを示す働きがあると結論づけた。

本稿は大学生の改まらない会話をデータとして用いたため、より年上の世代による会話やより改まった会話において、本稿での結果を検証することが必要であるが、これらについては今後の課題とする。

注

- 1) 例文中の“ ” は、話者及び話者以外の発話の内容の引用、< > は、笑いながら発話したものや笑い等を示し、相手の発話中に打たれたあいづちはその発話の最も近い部分に()の中に入れて示している。
- 2) データ中の「なんか」には、辞書に記載の代名詞的用法と副詞的用法が含まれているが、それらは連続体をなしており、その境界線を引くのが困難であるため、すべてを分析対象とした。但し、副助詞的用法（例：暑くて勉強**なんか**できない。）は除外した。
- 3) [初対面⑤/83-86]は、初対面同士5番目の会話の83-86行目を引用したことを意味する。左端のUF10は初対面会話の10番目の話者を表す。友人会話の話者はIF10のように表す。

参考文献

内田らら (2001) 「会話に見られる「なんか」と文化化：「前置き表現」の「なんか」は単なる口ぐせか？」『東京学芸大学工

学部紀要人文・社会編』24(2)、pp.1-9
 エメット啓子(2001)「『なんか』—会話への積極的参加を促すインターアクションアルマーカー」南雅彦・アラム佐々木幸子編『言語学と日本語教育 II』くろしお出版、pp.201-217
 鈴木佳奈(2000)「会話における『なんか』の機能に関する一考察」『大阪大学言語文化学』9、pp.63-78
 大工原勇人(2009)「副詞『なんか』の意味と韻律」『日本語文法』9(1)、pp.37-53
 田窪行則・金水敏(1997)「応答詞・感動詞の談話的機能」音声文法研究会編『文法と音声』くろしお出版、pp.257-280
 林千賀(2006)「ディスコース・マーカー『なんか』の発達—意味の漂白化—」『昭和女子大学大学院言語教育・コミュニケーション研究』1、pp.39-51
 山根智恵(2002)『日本語の談話におけるフィラー』くろしお出版
 Philips, Mieko K. (1998) *Discourse markers in Japanese : Connectives, Fillers and Interactional particles*. Michigan State University.
 宮永愛子(広島大学大学院生)
 大浜るい子(広島大学大学院)

◇表現研究関係文献紹介

香西秀信『論理病をなおす! —処方箋としての詭弁』(筑摩書房、ちくま新書、平成21年11月刊、¥714)

実に不思議な本である。何が「論理病」なのか、何が「詭弁」なのか、読み進めるにつれ、だんだん分からなくなくなり、もしかして騙されているのかもという気にさせられてしまうのである。

説明が難解というわけでは決してない。むしろ歯切れが良すぎるくらい明快である。時折出てくる「ただの馬鹿である」というフレーズなど、膝の皿を割ってしまいかねないほど、痛快である。

では、なぜ騙されたような気になってしまうのか。あるいは「詭弁に欺かれまい」として、正しい理屈に欺かれ(p.183)ているからかもしれない。なにしろ、本書に取り上げられた事例にたいする、どの説明をとっても、はげしく同意することばかりなのである。さすがに、これはちょっとアヤシイのではないか。

たとえば、第四章「論より人が気に喰わない」。思い当たる節が多々あり、そのたびに自戒させられるのであるが、なんと「人は論の一部となり、その正しさを論証するための根拠を補完する役割を果たす」(p.142)と仰せではないか。もう、溜飲が下がりまくりである。

最後の「あとがきにかえて——語学の達人に学べるか?」も謎である。この1篇だけでも、小気味良いエッセイとして楽しめるのであるが、なぜこれが他ならぬ本書の「あとがきにかえて」になるのか。どなたか、ぜひ教えてください…。そのためには、まずご一読を。騙されること? 必至である。(半沢幹一)